

研究主題 共生社会の形成に向けて、一人一人の教育的ニーズに応え、
豊かに生きる力をはぐくむ特別支援教育の推進と充実
—よりきめ細かな指導・支援を子どもたちに届けるために—

調査の趣旨

現在、特別支援学級在籍児童生徒の定数は、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律によって8名までと定められている。そのため、この定数までは、個々の教育的ニーズに応じた指導や支援を実施することが求められている。しかし、近年、特別支援学級在籍児童生徒の増加、障害の重度・重複化、そして、多様化が進み、そのニーズには十分に應えることはかなり困難になっているのではないかという現状と、8名という定数について学級担任は不安を抱えているという実情があるのではないかと考えている。そこで、本年度は、安全管理面、学習指導面、生活指導・生徒指導面に焦点を当て、実態調査を実施し、現状と課題を明確にしていくこととした。

2 実態調査校について

尾張地区、三河地区の小中学校数のそれぞれ4分の1程度を抽出校とし、調査対象校の知的障害特別支援学級担任あるいは自閉症・情緒障害特別支援学級担任のいずれか1名を調査対象者として回答を依頼した。

3 実態調査の結果

(1) 所在地区の調査学校数 (校)

尾張地区 (小88 中45)	133
三河地区 (小70 中31)	101

(2) 学校種 (校)

小学校	158
中学校	76

(3) 学級の種別 (学級)

知的障害 (小80 中36)	116
自閉症・情緒障害 (小78 中40)	118

(4) 抽出校の学級数 (校)

学級数	小学校		中学校	
10 学級以下	9	6%	3	4%
11~15	32	20%	20	26%
16~20	38	24%	23	30%
21~25	33	21%	18	24%
26~30	35	22%	10	13%
31 学級以上	11	7%	2	3%

今回の調査では、学級数が11学級から25学級である規模の小中学校からの回答が、小学校では65%、中学校では80%の割合を占めている。

(5) 抽出校の特別支援学級数 (校)

学級数	小学校		中学校	
2 学級	26	16%	25	33%
3 学級	36	23%	23	30%
4 学級	37	23%	14	18%
5 学級	28	18%	13	17%
6 学級	17	11%	0	0
7 学級	10	6%	1	1%
8 学級	4	3%	0	0

今回の調査では、特別支援学級の設置状況が6学級以上もある小学校が全体の20%を占めている。また、小学校で8学級設置、中学校で7学級設置している学校があり、特別支援学級在籍児童生徒数の増加が伺える。

(6) 担任している特別支援学級の児童生徒数

「小学校」158 校対象

児童数	学校数	割合
1 人	3	1.9%
2 人	9	5.7%
3 人	10	6.3%
4 人	18	11.4%
5 人	38	24.0%
6 人	35	22.2%
7 人	35	22.2%
8 人	10	6.3%

「中学校」76 校対象

生徒数	学校数	割合
1 人	7	9.2%
2 人	0	0%
3 人	8	10.5%
4 人	8	10.5%
5 人	20	26.3%
6 人	19	25.0%
7 人	5	6.6%
8 人	9	11.9%

今回の調査では、小学校では5人の児童を担当する割合が24%と最も多く、続いて6人・7人が22.2%であった。中学校でも5人の生徒を担当する割合が最も高く26.3%であり、続いて6人の25%であった。小学校、中学校ともに、多くの教員が5人以上の児童生徒のいる学級の担任をしている。前回の調査では、小学校で5人以上の児童がいる学級の担任をする割合が58.9%であったのに対し、今回の調査では74.7%に増加し、中学校で5人以上の生徒のいる学級の担任をする割合が前回調査では53.7%であったのに対し、今回の調査で69.8%に増加している。特別支援学級に在籍する児童、生徒の増加を裏付ける結果になっている。

(7) 担任している児童生徒の学年

「小学校」158 校対象

担当学年数	学校数	割合
1つの学年	7	4.4%
2つの学年	29	18.3%
3つの学年	54	34.2%
4つの学年	46	29.1%
5つの学年	20	12.7%
6つの学年	2	1.3%

今回の調査では、前回調査で0%であった、小学校6学年すべての学年を担当する教員が1.3%いることが分かった。また、4つ以上の学年を担当する教員割合が、前回は40.7%だったのに対し、今回は43.1%に上昇している。

「中学校」76 校対象

担当学年数	学校数	割合
1つの学年	9	11.8%
2つの学年	29	38.2%
3つの学年	38	50.0%

中学校では、半数の教員が3つの学年にまたがって担当している実態があり、前回の調査結果41.1%と比べ、上昇している。これらの結果をもとに、定数8名についてどう思うかという調査では、次のような結果がでた。

(8) 児童数生徒数の8名について

小学校	人数	割合
8名では多い	151	95.6%
8名はちょうど良い	0	0%
8名では少ない	0	0%
その他	7	4.4%

その他の回答には、「8名では多すぎる。安全確保を中心とした、『保育』であれば可能かもしれないが、『教育』ではかなり難しい」とか、「小学校の6学年と中学校の3学年の学年の数が倍違う

のに、小学校と中学校で一律8名は違うのではないかと感じる」など、8名では多いことの意見を加えたものであった。

中学校	人数	割合
8名では多い	73	96.1%
8名はちょうど良い	2	2.6%
8名では少ない	1	1.3%
その他	0	0%

前回調査で、8名では多いという回答の割合が91.6%と高い数値であったが、今回の調査では、そこからさらに5%近く上昇した結果となっている。

(9) 8名の定数で不安に感じること

「小学校」…158人（複数回答可）

「中学校」…76人（複数回答可）

小学校【安全管理面について】	人数	割合
衝動的な行動への対応	151	96%
健康面の状態を的確に把握	75	47%
他者のこだわりの強い行動から児童生徒をまもること	142	90%
道具を指導する授業等において安全な使用方法の徹底	139	88%
中学校【安全管理面について】	人数	割合
衝動的な行動への対応	74	97%
健康面の状態を的確に把握	35	46%
他者のこだわりの強い行動から児童生徒をまもること	59	78%
道具を指導する授業等において安全な使用方法の徹底	62	82%

安全管理面においては、不安を感じることとして、衝動的な行動への対応が小学校、中学校ともに特に高くなっているのが見てとれる。この結果の背景には、「物や活動への過度の要求がある子ども」や「強い承認欲求のある子ども」、「感覚過敏のある子ども」など、個の特性の多様化が進んだことが考えられる。

寄せられた声には、「トイレの介助や着替え等で教室を離れる回数が多く、その間教室にいる児童の管理が困難なときがある」や、「歩行が不安定な児童の階段昇降に付き添う必要があったり、こだわりが強くて行動が遅かったりする児童が複数いるため、一人では対応に限界を感じている」など、切実な声があがっている。

さらに、「現在6名を担当しているが、カッターナイフやコンパス等の指導など、安全をきちんと確保できていないかもしれない、という不安を感じている」、また、「石や体に害になる物も構わず口に入れてしまう児童がいるので、わずかな時間であっても目を離すことができない」など、安全面への不安を感じていながら、日々の学習活動を展開している現場の苦しい現状が伺えた。

小学校【学習指導面について】	人数	割合
異学年が多くなり、学年齢に応じた教育の提供	157	99%
障害の度合いに応じた教材教具の準備や提供	138	87%
自立活動など、目標が異なり対応が難しい	145	92%
交流授業などの様子をきちんと見届けられない	147	93%
中学校【学習指導面について】	人数	割合
異学年が多くなり、学年齢に応じた教育の提供	62	82%
障害の度合いに応じた教材教具の準備や提供	59	78%
自立活動など、目標が異なり対応が難しい	54	71%
交流授業などの様子をきちんと見届けられない	67	88%

学習指導面において不安を感じることと

しては、小学校の回答の方がすべての設問で、高い数値を示す結果となった。

特に学年齢に応じた教育の提供では、一人一人の児童に個別指導することで学習を進める形態の場合、小学生の方がより時間がかかるなど、一人にかけられる時間が物理的に減るためであると考えられる。寄せられた声の中には、「8人いると8通りの授業を展開しなくてはいけなくて、一人に対して対応できる時間がわずかしかなかった。障害の特性上、待つことが難しい児童が多いので、一人で8人の児童の学習を見ることは不可能であると感じる」と、現状5名であっても対応に苦慮している学級担任から、8名になった時の不安感が届いている。

小学校【生活指導・生徒指導面】	人数	割合
日常生活を支援する対応	136	86%
自慰行為や他傷行為等を制止するための対応	134	85%
非行や迷惑行為等に対する対応	142	90%
性的な興味等に対する対応	73	46%
中学校【生活指導・生徒指導面】	人数	割合
日常生活を支援する対応	44	58%
自慰行為や他傷行為等を制止するための対応	49	65%
非行や迷惑行為等に対する対応	69	91%
性的な興味等に対する対応	34	45%

生活指導・生徒指導面では、非行や迷惑行為等に対する対応について、高い数値となっている。

寄せられた声には、「交流学級でのトラブル対応をするため、各担任と情報交換をする機会が多くなり、子どもの人数が多くなればなるほど、事案が多く発生し、各担

任と時間の確保が困難になる」と交流の時間におきてしまうトラブル対応や、「相性の良くない子どもたちを、同じ教室で指導するには、正直限界を感じる」といった、教室が1つであることへの対応の困難さがあげられている。

また、「通常学級の1つの教室をパターションで仕切り、8名と8名の2クラスで使用していて、子どもが落ち着かない。1学級で1部屋を使用できるような教室環境整備を進めていただきたい」といったハード面への声もあげられている。

さらに、インターネットなどからの情報による性的な興味、関心への指導や、性被害を防ぐための教育への心配する声も大きくなっており、今まで以上に力を入れていくべきであるという意見もあった。

4 おわりに

今回の実態調査結果から、小学校も中学校も8名の定数では、様々な面で不安を抱いている回答者が多くいることが分かった。

特に、学習指導面においては学年が6つある小学校の担任は、個に応じたきめ細やかな支援のために、様々な工夫を講じながら対応するため、その準備などへの苦労が改めて浮き彫りとなった。また、小学校、中学校ともに、非行や迷惑行為への指導に悩みを抱える声が多くあると同時に、SNS などへの対応など今日的な課題への指導法にも多くの時間をかけながらも、その効果的な方法を模索している様子も伺えた。

学校現場に対する児童生徒、保護者、地域からの教育的ニーズが多様化するなか、一人一人に対応した学びを実現するために、特別支援学級の学級編成基準を8名から引き下げられるように、各関係機関に粘り強く働きかけていきたい。